

旧制中学の内部選抜と教育効果に関する研究 —山形県鶴岡中学の事例—

- 吉田文（メディア教育開発センター）
天野郁夫（国立財務センター）
高橋一郎（大阪教育大学）
○河野誠哉（日本学術振興会特別研究員）
○寺崎里水（お茶の水女子大学大学院）

1. 問題の設定

本研究は、戦前期の中学校の5年間の過程において、入学者のどの程度が卒業まで到達しどの程度が落第や中退をしていたのかといった内部選抜の実態と、どのような属性をもつ者が選抜を経て卒業に至ったのかを明らかにすることを目的とする。

入学者の内部選抜過程について、それを社会的属性との関係に注目して分析をする理由は、先行研究の示す中学校像が異なる中学校イメージを提供し、明瞭な一つの像を描くに至っていないからである。

その中学校像の1つは、競争・淘汰機関としての中学校というものである。深谷（1969）、天野（1982）、斉藤（1995）、浅水（1995）などの研究では、入学試験という学力選抜を経た入学者は、さらに5年間の間に落第や中退によって徐々に淘汰され、卒業まで到達する者は明治後期において5～6割程度であったことが明らかにされている。

こうした落第や中退、とくに中退が発生する原因として、一方では、中学校の内部過程が学力による選抜に貫かれており、そうした業績主義的選抜からの落伍によるといわれ、他方では、卒業まで在学を要することなく就業していく者が、家業継承を中心とする農業や商工業者に多かったという自発的退学の存在が指摘されている。こうした説明をより明確にするには、落第者や中退者がどのような社会的属性をもつ者に多かったのかを探るとともに、それに加えて、

落第・中退者がそれに至るまでの学校内での学業達成との関連を明らかにする必要がある。しかし、こうした視点での研究は、資料的制約もあってこれまでほとんどなされてこなかったといつてよい。

学校内の内部選抜過程において、落第や中退、とくに中退者について、それに至るまでの学業達成と社会的属性との関連を分析することは、学校の業績主義的な選抜と教育を受ける側の選択との関連を検討し、中学校の像を明瞭にするうえで重要な意味をもつ。なぜなら、卒業に至り上級学校に進学する者と社会的属性との関連があるという、次に述べるもう1つの中学校像との関連でいえば、その裏返しの存在として卒業に至らなかった者、あるいは、正規の就業年限で卒業に至らなかった者が、どのような社会的属性をもつのかを問うことで、はじめて、卒業・中退という内部選抜の様相を教育を受ける側からみることができるからである。

もう1つの中学校像としては、菊池（1965）、天野（1982）、天野ほか（1991）などの研究が明らかにしているように、中学校へは、農業、商工業出身者に対して士族、公務自由業出身者が、その社会全体の構成比よりも多く入学し、また上級学校へ進学する比率も高かった。このことは、次世代に伝達すべき家業をもたない士族、公務自由業出身者は、中学校への進学、さらにはそこから上級学校への進学を梃子にして社会的再生産をはかるうとしたからであり、富

裕な平民層である農業・商工業層は、上級学校への進学よりはむしろ家業継承のための教育の意義を中学校教育に見出していたからであると説明された。

すなわち、教育を受ける側からみると、社会集団によって中学校教育に求める意味が異なることが、いかえれば、社会集団はそれぞれの集団の必要性に応じて中学校の利用の仕方が異なるために、入学や進学に集団間の差異があるという中学校像が提供されているのである。

しかし、こうした入学時の選抜と卒業時の配分においてみられる特定の社会集団との関連の分析では、業績主義的といわれる学校の内部選抜が、社会的属性との関連で入学から卒業に至る過程にどのような関りをもったのかという視点を捨象したままであり、中学校の機能をまさしく技術機能主義的にしか捉えていないという問題をもつ。

すなわち、これらをまとめれば、この研究の目的とは、中学校入学者の学校内での業績と社会的属性とに注目して中学校内部の選抜過程を明らかにすることで、先行研究によって提供された中学校像に整合的なイメージを得ることにある。また、この背後には、学校が行う選抜がどの程度業績主義的であったのか、教育を受ける側がとる進路にどこまで自由選択の余地があったのか、その両者の関連を解き明かすことで、中学校とはどのような機関であったかを描くことが、もう1つのねらいとして意図されている。

さらに、ここであげた先行研究のほとんどが明治期のみを分析の対象として、異なる中学校像を析出しているが、中学校のみならず中等教育が拡大し、また、民間企業の勃興する中で多量の会社員が輩出されていく大正から昭和という時期においても同じ様な中学校像が描けるのか否かも検討の余地がある。

そこで、山形県鶴岡市にある旧制鶴岡中学校を事例として、1911年から1930年という大正から昭和に至る20年間（中退者については、1918年から30年）の「学歴表」（一般の学歴簿に相当する）をもとに、成績と属性に関わる

諸変数との関連を分析することによって、選抜・淘汰機関としての中学校像と特定社会集団との親和性をもつ中学校像との接合を試みることにしたい。学歴表の記載内容の疎密という制約により、卒業者については、1911年から30年までの1949ケースを、中退者については、1918年から30年までの1742ケース（中退者は394ケース）を対象に分析を加える。

ここで成績を示す指標として用いるのは、学年末の総合成績にもとづく学年内順位である。年度によって学年の修了者数が異なることから、この数値そのものはそのままでは相互に比較不可能なため、これを100人あたりの順位を示すかたちへと標準化をほどこし、「席順スコア」とした（したがって値がゼロに近いほど上位で、最下位が100になる）。さらにそれを均等に分割した「席順ランク」を用いた。

以下の分析では、第1に、入学者のどの程度が卒業に至り、どの程度が落第や中退をするのか、その内部選抜の実態を社会集団との関わりで把握し、第2に、卒業に至らないグループについて、その理由、成績、社会集団との関連を検討する。第3に、卒業に至ったグループについて、同様に成績と社会集団との関連を分析する。

2. 「競争と淘汰」の実態と家庭的背景

卒業者と退学者の両方をほとんど欠落なく捕捉し得た1918年入学から30年入学者をデータとして、まずは「競争と淘汰」の実態について検討する。

総ケース数1742をまず卒業者（1348）と退学者（394）に分け、卒業者についてはさらに落第経験の有無によって順調組（1144）と落第組（204）の2つへと、計3つに大きく分類した。

これまでの研究で旧制中学の選抜の厳しさを表す際に指標とされていたのは、入学者に対する落第経験のない卒業者（順調組）の割合である（ここでは便宜的に「サバイバル率」と呼ぶ

ことにする)。当該期間における鶴岡中学のサバイバル率は 65.7 % である。ただし、入学年度別では、1920 年から 1926 年ごろ、「脱落」者の割合が増加し、サバイバル率が他の年度よりかなり下がっている。この時期は、第一次世界大戦の好景気に影響されて進学希望が増加し、学校側がそれに対応するために授業時数を増やし、補習授業を設けた時期に該当する。また、学校史には 1926 年に成績評価を厳しくしたために 70 名の落第生が出たことが特記されているので、この時期は学力による選抜が厳しく行われた可能性が高い。

さて、このサバイバル率を族籍別、親職別に算出してみると、族籍別、親職別の割合に大きな変化がないため、サバイバル率と特定の家庭的背景との間に一定の傾向はみられない(表 1、表 2 参照)。

では学業成績との関係はどうだろうか。ここでさしあたり全ケースに対して利用できる成績データは入学時点のものであるが、欠損値を除いた全 1647 ケースについて、入学席次ランクと順調組、落第組、退学者の関係をみた。すると、入学時の席次が悪い者ほど退学する可能性が高く、入学時の席次がよい者ほど順調に卒業する可能性が高いという一定の傾向がみられた。このことは、順調組と落第組でそれぞれ席次スコアの平均をとり、5 年間の推移を比較した結果からもその差は明らかである。したがって、中学校における「競争と淘汰」の過程において、順調に進級し卒業していくうえでの家庭的背景による影響は小さく、他方で成績によって規定される度合いはそれなりに大きい、という 1 つの結論が導かれる。

3. 「半退理由」と家庭的背景

さて、先行研究が資料的な制約から決定的に欠いていた分析として、退学事由の詳細な検討があげられる。前節において、中学校内部選抜の過程では家庭的背景の影響は小さく成績の影響は大きい、という 1 つの結論を導いたが、そ

れは、結果として「脱落」とカウントされる集団と「卒業」あるいは「順調」とカウントされる集団との間で家庭的背景に差が見いだせない、ということを示したにすぎない。先行研究では、中学校内部での「競争と淘汰」の過程における学力の影響を大きく評価していた。少なくとも前項での分析はそれを裏付けるものであったわけが、ここでさらに「半退理由」と社会的属性をクロスさせることによって、誰が、どうして退学したのかを詳細に分析する。

ここで用いる「半退理由」の内訳としては、当該期間における鶴岡中学の退学者「学歴表」に記載のあった「進学」「転学」「家事都合」「疾病・死亡」というカテゴリーをそのまま採用し、記載のない者については「不明」としてコード化した。この「半退理由」という変数を加えると、在籍した生徒の入学後の経過についての内訳は次のようにバリエーションを増すのである。

卒業者 (1348)	}	順調組(1144)
		落第組(204)
入学者 (1742)	}	進学(16)
		転学(38)
退学者 (394)	}	家事都合(141)
		疾病・死亡(28)
		不明(171)

「半退理由」別に退学者をみると、退学者のなかで学業の継続／非継続という新たな分類が成り立つことがわかる。つまり、制度上は「脱落」者としてカウントされてしまっている「進学」「転学」を学業継続者として捉え直せば、本当に「脱落」したのは誰か、が明らかになるのである。

親職別に「半退理由」をみると、公務自由業で転学者が多く、商工業、農業で家事都合による退学者が多い。「半退理由」が不明の者を除いて同様に親職別にみた場合でも、その傾向がいつそう強くなることが明らかである。以上か

ら得られる知見は、退学者を「半退理由」別にみると学業の継続／非継続について親職の及ぼす影響が大きいというものであり、そうすると前項で得られた結論は一部修正を加えなければならなくなる。つまり、落第に関しては家庭的背景との間に一定の傾向はうかがえないが、退学者に関しては、それをさらに学業の継続／非継続とに分類してみた場合、非継続者と家庭的背景との間に一定の傾向がうかがえるのである。

この結論から新たに検証すべき問題として浮かび上がるのは、学業成績と家庭的背景との間に一定の傾向がみられるのではないか、という問いである。したがって、次節では入学後の経過に重要な影響を及ぼすと思われる家庭的背景と学業成績との関係について考察する。

4. 学校内部での教育達成とその家庭的背景

最後に学校内部での学業面でのパフォーマンスを示す学業成績そのものの位置づけについて、検討を加えていくことにする。

前節までの分析から、順調組／落第組／退学者の比率において家庭的な背景による差異は大きくないという事実が明らかにされたが、他方で卒業後の進路（進学／非進学）に関しては、家庭的背景による明確な違いがあることが既に確認されている。具体的には、族籍別でいうと、そう大きくはないものの平民層に対する士族層の優位は確かに認められ、また親職別ではやはり、「農業」や「商工業」よりも「公務自由業」として括られる職種のほうが、進学率がより高いという結果が得られている。

ではこのような進学／非進学の振り分けの過程において、学校内部での各生徒の学業面でのパフォーマンスは一体どのような形で関わっていたのか？ ここでは、卒業まで到達したケース（つまり順調組と落第組を合わせた数）をサンプルとして、彼らの教育達成について検討していく。

最初に成績と進路（進学／非進学）との関係

をみてみると、両者の間には明確な傾向性があることが明らかになった。単純に、成績のよい者ほど進学する率が高いという傾向である。各人にとって進学という選択が学業の継続を意味するものである以上、それは当然予想される結果でもあるだろう。成績は進路選択と結びついた一要因として十分に有効なものであるという事実が確かに認められるのである。

では次に、ここで成績という変数によって示された各生徒の学業面でのパフォーマンスと、それぞれの家庭的な背景とのあいだには、どのような関係が認められるであろうか。「成績は確かに卒業後の進路選択に対して一定の傾向性を有する」という上述の結果から引き出される可能性のひとつとして、我々はここで、成績という変数が進学機会の偏りを説明する媒介項として関与しているという関係を思い浮かべることができるはずである。すなわち、進学への高いアスピレーションをもった社会層は学校の内部過程でも高いレベルでのパフォーマンスを示し、さらにそれを梃子として進学への道を開いたであろうという構図である。そうだとすると、我々はここで進学率の高いグループのほうが成績も高いという傾向性を見出すことになるはずである。

このような見通しのもと、分析によって以下のような事実が明らかにされた。

まずは族籍についてみてみると、入学時点においてわずかに士族層の優位が認められるものの、在学中の5年間において士族と平民の間には成績の平均、ばらつき共に、みるべき差異はほとんど認められなかった。この結果は、近代化過程における教育機会を検討した諸研究において、従来、学校教育の利用層としての士族の役割が強調されてきたことと照らし合わせると興味深い事実を提出するものといえるはずである。高い進学アスピレーションを有していたといわれる彼等であっても、現実の学校の内部にあっては、必ずしも優秀な成績を収めていたとは限らないということになるからである。

しかし、本研究で扱われたデータにおいて士

族／平民の間での上級学校進学率の差はもともとそれほど大きいものではなかった。そのことを考慮に入れると、成績に差がないというここの分析結果はそれほど意外なものではないということになるのかもしれない。

さらに時期的な問題も考慮に入れる必要もあるだろう。先行研究が対象としていたのは主に明治後期を中心とする時期であったのに対して、本研究の扱うデータはそれよりもいくぶん後の時期に属する。この頃にはすでに「士族のニートス」は変容し、進学行動の規定要因としては族籍よりも職業のほうがより重要性を増していたとするならば、親職との関連のほうが我々にとってはより重要になってくるはずである。

そこで今度は親職別の成績の違いを調べてみたところ、入学から卒業までの席順スコア平均の推移を示したグラフからも明らかなように（グラフ）、いちばん際立った位置にあるのは「神官・僧侶」である。入学してすぐ全体的にその成績水準は低下し、その後一貫して低水準のまま卒業を迎えていることがわかる。実際にこのグループは今回とりあげたサンプルのなかでも進学率の低いほうに属しており、このような進学アスピレーションの低さが学校内の教育達成の低さにそのまま結びついた事例として考えることがひとまずできそうである。

しかし、その他のカテゴリーごとの成績水準の間にはそれほど目立った差異は認められない。最も高い進学率を示している「専門」は、入学して最初の時期でこそいかにほどの優位が見てとれるが、学年を上がるにつれ、緩やかにだがむしろ低下していく傾向が認められる。そのほかに進学率の高いグループとしては「官公吏」と「教員」が挙げられるが、彼等が抜きに出て高い成績を示しているということは全くなく、ほとんど平均的な水準で推移している。

また、逆に進学率の低いグループに目を向けてみると、「農業」が全体的にやや低めの水準で推移しているようにも見えるが、他の諸グループとの違いはそれほど明白というわけではな

く、また「商業」や「鉱工業」にしてもほぼ平均的な水準を推移しているということが出来る。

総じて、進学率の高い層が格別に高い成績水準を示しているということはなく、また彼らが在学の過程で他のグループを押しつけて成績を上げていくというような変化も認められなかった。

以上の分析で扱ったサンプルはすべて卒業まで到達できたケースであり、退学者が補足しきれていないという難点を抱えてはいる。しかし前節までの分析で示したとおり、「サバイバル率」には家庭的背景による差異が認められなかった以上、ここで「生き残り」の彼らから得られた分析結果についても、家庭的背景によるバイアスは小さいものと考えられる。

以上を踏まえると、家庭的な背景が学校内の学業面でのパフォーマンスをも規定していたであろうという想定は、部分的にしか正しいとはいえないことになる。中学校内部での教育達成は、卒業後の進学傾向から想像されるようには一義的に家庭的背景（この場合は族籍と親職）による規定を被るものではなかったということができる。

◆主な参考文献

- 天野郁夫 1982 『教育と選抜』第一法規
 天野ほか 1991 『学歴主義の社会史』有信堂
 浅水一則 1995 「旧制中学校『半途退学者』の様相」『歴史研究』33号
 深谷昌志 1969 『学歴主義の系譜』
 菊池域司 1967 「近代日本における中等教育機会」『教育社会学研究』第22集
 齋藤利彦 1995 『競争と管理の学校史』東京大学出版会
 園田英弘ほか 1995 『士族の歴史社会学的研究』名古屋大学出版会

表1 族籍別順調組・落第組・退学者の割合

	士族	平民	不明
順調組	68.4	65.1	65.2
落第組	10.0	13.1	10.9
退学者	21.6	21.9	23.8
計	100.0(269)	100.0(750)	100.0(722)

注：1918-1930 入学者

表2 親職別順調組・落第組・退学者の割合

	公務自由業	商工業	農業	神官・僧侶	無職	その他・不明
順調組	69.0	66.9	61.8	64.3	66.5	54.3
落第組	11.4	9.7	13.6	17.1	11.0	14.3
退学者	19.6	23.4	24.6	18.6	22.5	31.4
計	100.0(500)	100.0(526)	100.0(403)	100.0(70)	100.0(173)	100.0(70)

注：1918-1930 入学者

グラフ 親職別席次スコア平均の推移 (1911-1930 入学者)

